

2022

道

No.47



西南学院大学 神学部学生会

1. 巻頭言

《移り変わりを喜びつつ、期待して歩む》

2022 年度 学生会会長 原田 仰

主の御名を賛美いたします。日頃より私共神学生の学びと生活、また神学生の働きのためにお祈りとご支援をいただき、心より感謝いたします。諸教会・伝道所の皆様が祈りに覚えてくださっていることに強く励まされています。その励ましの中で行われる学びの一つ一つが神様によって遣わされる牧会の現場へのよき準備となっています。またその励ましがあるからこそ、学びに対してますます真剣に取り組むことが出来ております。これからも神様が神学生一人一人をふさわしいものへと導いてくださるよう引き続きお祈りいただければ幸いです。

本年度、日本バプテスト連盟では天城山荘の譲渡や機構改革がありました。これらのことは連盟の今後の働きにおいて、とても大きな変化であると思います。この変化によって痛みを覚えておられる方も少なくはないでしょう。ただ、ここで生まれた痛みは決して忘れてはいけないものであるとも感じています。その痛みの正体は一体何であるのか、なぜ痛まなければならなかったのか、この痛みを負う出来事はどこに向かうためのものなのか、それを今後は問うていかなければならないでしょう。また新しく始まった歩みに不安を感じる方もおられると思います。だからこそ、今、私たちは神様に祈り、頼りながら歩んでいくことが求められていると思います。神様が示す道を求め大胆に歩むときにあるのかもしれません。

さて神学部学生会では、新入生を迎え、半数以上が新しいメンバーということもあり、神学寮の雰囲気も昨年までとはまるで違うものとなっています。在校生は時にその変化に困惑しながら、新入寮生も新しい環境の中で多くの不安を抱えながらのスタートでした。今では、それぞれ寮生活にも慣れてきているころであると思います。本年度の『道』では、そんな新しい面々のことを読者の皆さんに知っていただける良い機会であると思っています。この記事で見られるのはほんの一側面にすぎませんが、これからの数年間を経て、彼らの中で何かが変わっていく様子が記事に表れていくでしょう。また在校生や神学部教授の中にもその環境の変化に影響を受け、昨年までとは違った思いが表れているかもしれません。

この冊子では、神学生たちや神学部教授がそれぞれの想いを言葉にしています。彼らが歩んできた「道」を、これから歩んでいく「道」を、それぞれに対する神様の働きかけを読み取っていただくと幸いです。また読者の皆様に、これらの証を通して、神様との新たな出会いや、神様の励ましがあることを心より願っております。

目次

1.巻頭言・・・・・・・・・・1

《移り変わりを喜びつつ、期待して歩む》 2022 年度学生会長 原田仰

2.教員からメッセージ・・・・・・・・3

《第二の獣》 濱野道雄

《**Bold faith**》 金丸英子

《「臨床牧会教育運動の父」アントン・ボイセン》 才藤千津子

《黙示録 10 章の大きな天使》須藤伊知郎

《「献身」の主体は「キリストのからだなる教会」》日原広志

《毎日新しい人生が私の前に》黄南徳

《中世について映画を見て、現代の問題を考える》Girardo Rodriguez

3.特集記事・・・・・・・・・・15

《新入生の証集》

4.神学生紹介・・・・・・・・・・18

【最終学年】

特別研修生 湯川洋久

【在校生】

大学院神学研究科修士 1 年 原田仰・吉田睿濫

神学部神学科 2 年 長尾基詩

【新入生】

神学部神学科 3 年 奥田悟

特別研修生 石原誠

5.編集後記・・・・・・・・・・25

2.教員からのメッセージ

《第二の獣》

神学部教授（神学部長）：濱野道雄



「第二の獣は、獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。」（黙示録 13：15）

安倍元首相が殺害された事件に関連し、この原稿を書いている現在も、旧統一協会と政治の癒着について、また国葬の問題について、盛んに報道されています。それらを聞くと、私はどうにも重い気持ちになります。安倍氏の殺害は許されるものではありません（私は、暗殺計画に関しボンヘッファーも安重根も美化できません）。その大前提の上で、なお重い気持ちになるのは、「暴力の世界が完成されてしまったかのように見える」からでしょう。安倍氏が、旧統一協会を利用する形で作り出した暴力の世界が（安保法制、森加計桜問題の失命者を伴う闇への葬り、共謀罪や特定秘密保護法の強行採決、持続化給付金等の際の電通等との癒着、等々）、「何をやっても、話しても無駄だ」というムードをこの国に生み、暴力には暴力で向き合うしかないと言議者を駆り立てたなら、そして自らが生み出した暴力の世界に安倍氏自身が飲み込まれたなら、もう誰もこの暴力の世界を止められないのではという思いがしてしまったのです。

黙示録 13 章には二頭の獣がでてきます。第一の獣である暴力的な権力だけが恐ろしいはありません。その第一の獣に追従し、その暴力による世界を拡大する、第二の獣がでてきます。そして一般の私たちが、誰でも第二の獣の働きを担いうるのかもしれませんが。

安倍氏が獣だったというわけではありません。彼は人間です。私は彼のために祈ります。ただその「首相の役割」において「第一の獣的な働き」をしたのであれば、「第二の獣的な働き」を旧統一協会が行い、それが反転する形で、しかしやはり暴力的に容疑者も第二の獣の働きを行い、第一の獣を飲み込んでしまった。この世界を始めた第一獣がいなくなったなら、もう誰にも止められない。その暴力の世界に踊る第二の獣の働きは、国葬を進める人々によってさらに進められようとしている。

そしてその流れの中に、私自身もいます。岸信介元首相、勝共連合、旧統一協会、CIA と KCIA、共和党、南部バプテスト連盟（『アメリカ合衆国における統一協会の活動に関する要望書』連盟理事長、2001 等参照）、新生運動とそれを担った電通、等々の歴史の流れの中に、日本バプテスト連盟で育った私自身もいるのです。それら全ての周辺に例えば性差別の流れが顕著にみられるように、「獣たちの歴史」としての暴力の物語、ソフトに見える時にもパワーの濫用が行われた物語でもあった側面は無視できません。

しかし私たちは獣ではなく、組織でも制度でもイデオロギーでもなく、人間です。「これまでの

システム＝私」ではありません。たとえそのシステムの中を生きてきたにせよ、それを内側から全く転換するのです。悔い改める（＝メタノイア＝転換する）のです。第二の獣は刻印を押して個々人の自由な生き方を禁じます。異なるものが共に生きる世界を禁じます。その獣の手を振り払いたいのです。小羊（黙 14：1）キリストによってこれまでの物語を悔い改め、解放されたいのです。

そうして新しい物語を描くこと。これが神学の営みではないでしょうか。

《Bold Faith》

神学部教授：金丸 英子



恩師が2年前に、アメリカのCBFの総会で「バプテストに未来はあるか」と題した講演を行った。副題は「それを求めるならば、必要とされるのは勇気に満ちた大胆な（bold）信仰」である。先の見えない閉塞した現状に立ちすくみ、何から手をつけてよいのか混沌としているのは我々だけではないらしい。それにしても、「勇気に満ちた大胆な信仰」とはどんな信仰のことで、どこから来て、どのようにして養われるのかと考える。

留学時代の友人に、南部バプテストから他派に移り、その教派の牧師になった者がひとりならずいる。退職した神学校教師の中にも同じような人がいる。多くの場合、その人たちは喜び勇んでバプテストを出た訳ではない。周りのバプテスト教会が最早「バプテスト」とは呼べないと判断し、痛みと失望を味わった末の、信仰の新しい旅立ちであった。イングランドに住む別の恩師は、地域のバプテスト教会を素通りしてアングリカン教会に通う。神学や教会の伝統の違いを認識しつつも、そこでの礼拝と交わりを喜んでいる。渡英後、何十年もバプテスト系大学で教鞭をとり、同時にひとつのバプテスト教会の牧師も務めた。その経歴を買われてか、そのアングリカン教会の礼拝で奉仕をし、牧会チームにも加わっている。にもかかわらず、式次第の「マリアの賛美（Hail Mary）」だけはどうしても唱えることができないのだと言う。理由は、「バプテストであることをやめたわけではない」から、と。その恩師は、教派の違いを超えて豊かに存在する普遍的な真理に触れ、そこから魂の慰めと養いを得ている。地域のバプテスト教会では、それが望めないのだろう。

去年の『道』に「教派神学校で教派史を教える意義」について書いた。その後、「神学校とは何か」「神学教育とは何か」についても考えるようになった。「バプテストは何でもあり」は、よく耳にする言葉である。その真意を今ひとつ掴みかねてはいるが、「バプテストは何でもあり」がバプテストらしさであるなら、極端な話、教派神学校はそんなに必要ないのではない。加えて、教会の看板から「バプテスト」を削れば、もっと筋が通る。しかし他方、「今日我らはバプテストとして・・・」という悲痛な声も聞く。バプテストの主張にあまりこだわらず、間口を大きく広げるのか。それとも「真っ当な」バプテストを追い求めるのか。もし後者であるなら、問題は「では、どんなバプテストに？」であろう。

「現在の南部バプテスト（連盟）は最早バプテストとは呼べない」と考えるのは、私独りではない。様々な要因もあるだろうが、20世紀以降、アメリカ・プロテスタントの間で熾烈を極めるようになった教派間の競争は、その原因の主なものであろう。プログラム優先主義とビジネスモデルを軸にした教勢拡張に励み、そこに自らの存在の意義と価値を置き、競争を勝ち抜くことを目指してきた。強力なトップダウンで総力を結集させ、邁進してきた結果とも言える。

そこでは、神学的・聖書的な妥当性を備えた見解も、バプテストが歴史的に大切にしてきたあれこれも、時の連盟リーダーシップの方針に同調しなければ、無視され、「役に立たない」とキャンペーンを張られて、冷遇されてきた。そんなバプテストは御免被りたい。

ここまで書いて、「decent」と言う言葉が頭に浮かんだ。「真つ当な、良識にかなった、礼節のある」という意味がある。自分のアジェンダは一旦脇に置き、まず聖書の語るところに聴こうとする。銜いのない言葉。論を異にする相手にも向けられる誠実で善意の目と耳。よいものを一緒に求めるための裏切らない手。そのどれもが「decent」だ。「勇気に満ちた大胆な信仰」はそれを可能にするだろう。Decent でありたいと、しみじみ思う。

《「臨床牧会教育運動の父」アントン・ボイセン》

神学部教授：才藤千津子



西南学院大学の神学コースの学びの一つに、京都の日本バプテスト病院で行われる「臨床牧会実習」という夏期集中実習があります。この実習では、臨床牧会実患者さんを訪問し、出会うということ、まさに「現場での実践を通して生きた神学を学ぶ」というのがこの実習の目的です。残念ながら、ここ数年、コロナ感染拡大のために病院での実習ができませんが、方法を工夫して続けられています。この実習のことを考える時、「臨床牧会教育運動の父」と呼ばれるアントン・ボイセン (Anton Boisen, 1876 - 1965) のことを忘れることはできません。ボイセンは、20 世紀初頭のアメリカでこの運動を強力に推し進めた長老派の牧師です。

彼は、20 代で精神的病を発病し、その後、彼の言葉によると、断続的に 5 回もの大きな症状の発作を経験しました。彼の自伝を読むと、病気の経験をする中で、息詰まるような幻覚の体験、苦しい自己崩壊の経験、世界が滅亡するという恐れが次々と彼を襲ったことがよくわかります。彼は、教会の牧師になろうとしていましたが、その道も閉ざされてしまいました。

その苦しみの中で、ボイセンは、宗教と医学の距離を縮めて精神的病に苦しむ人々のために働きなさい、という神からの召命を体験しました。ボイセンは宗教心理学の勉強を始め、病院の臨床の場にキリスト教の牧会を導入する方法を探り始めました。そして、これはその時から、彼のただ一つの人生の召命となりました。自分の病気の経験から、彼は、精神の病を患う人が経験する感情の衰弱の根底には宗教的な要素があることを確信したのです。彼は、その後、何度も入退院を繰り返しながら、残りの生涯の大部分を精神病院のチャプレンかつ患者として過ごしました。

ボイセンは、1925 年、マサチューセッツ州ウーチェスター州立病院に招かれ、翌年、医師リチャード・キャボットらとともに、現在「臨床牧会教育」(CPE, Clinical Pastoral Education) と呼ばれている訓練を開始しました。それは、精神的危機にある人間の重く複雑な経験(悲しみ、魂の苦悩など)について、指導を受けながら病む人々から直接学ぶという実践訓練でした。彼は、患者さんの記録を「生きた人間の記録」と呼び、神学生が苦悩する人間から直接学ぶことは、当時ほとんど書物に基づいて行われていた神学教育を豊かなものにするに信じたのです。

こうした彼の努力は、「臨床牧会教育運動」として、紆余曲折をへながらも、アメリカだけではなく世界中の神学教育の現場に取り入れられていきました。このように 20 世紀の神学教育に大きな影響を与えた人が、実は、生涯深刻な病いに苦しみ続け、何度も人生に挫折した、一人の無力な牧会者であったということは、実に深い意味を持っていると思います。

臨床牧会教育が目指すものは、苦しみや痛みの中にある人たちと出会い、実践の中で自らも危機を経験しながら、牧会者として、人間としての自らのもろさ、弱さをしっかりと見つめることです。そして、それを神と仲間の前に告白し、お互いの弱さを受け入れることです。自分の弱さや脆さを見つめることで、初めて、弱さを日々追って生きる人々への理解と共感が深まるからです。そして、その体験が、最終的には、パウロの言葉によれば、「わたしが人間として弱いときにこそ、キリストの恵みと力によって強い」という逆説的な「大きな気づき」「大きな喜び」へと向かう端緒となるのです。このことは、牧会者として立つことへと召された人々が、今も、神学教育の中で学ばなければならない大切な事柄の一つだと、私は考えています。

《黙示録 10 章の大きな天使》

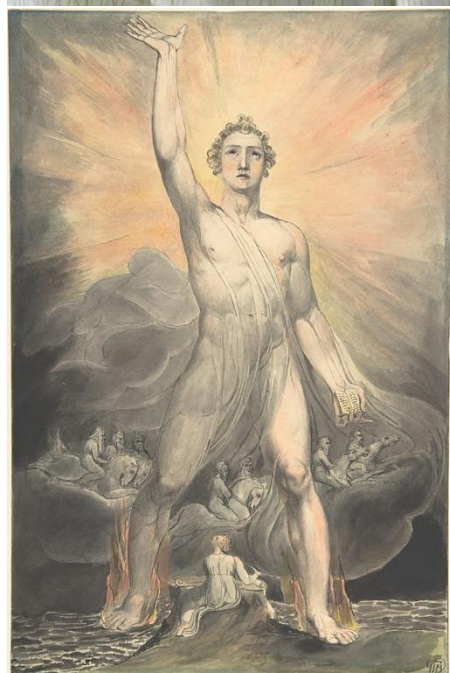
神学部教授：須藤伊知郎



6月の半ば、facebookで「友達」になっている日本キリスト教会府中中河原教会牧師の大石周平さんが、こういう絵をアップなさった。



礼拝説教で黙示録 10 章を取り上げたところ、それを聴いていた 6 歳の娘さんが、お姉ちゃんと協力して、聞いたままを描いてくれたのだそうだ。この想像力あふれる絵に感服した私は、イギリスの幻想的な詩人であり画家のウィリアム・ブレイクが描いた水彩画(1803~05 年頃、メトロポリタン美術館)をアップした。するとすぐ大石さんのお返事がきた。「娘にブレイクの絵を見せたところ、天使の大きさに目を丸くしていました。想像力をかき立てられるみたいです。聖書には、この天使は大きいって書いてあるの、って聞かれたので、須藤先生に聞いてみるね、と応えました。」



さて、これは困った。そもそもどうしてこのような天使の姿が黙示録 10 章に描かれているのだろうか。調べてみると、デイビッド・アウネ『ヨハネ黙示録注解』(ワード・ビブリカル・コメンタリー)に、これは世界七不思議に数えられたロドス島の巨像を背景にした叙述であるというのに行き当たった。さらに調べると、トーマス・ウィトウルスキー「並列による暗示的論駁『もう一人の力強い天使』(黙示録 10:1-2, 5) 太陽神とロドスの巨像」(2011 年)という論文が見つかった。これらを踏まえて、6 歳の娘さんに分かってもらえるような答えを工夫して書いてみた。

「聖書に直接「大きい」とは書いてませんが、「雲をまとっていて、そして虹が彼の頭の上にあ

り…」とあるので、読める人は「大きいんだな」と思ったでしょう。そして、この姿は実は、エーゲ海のロドスという島にあったものすごく大きな太陽の神の像の姿にとってもよく似ています。それは紀元前 304 年に戦いに勝った記念に、ロドスの人たちが破った敵の武具を集めて溶かした青銅で造ったもので紀元前 292 年に完成し、33 メートルの高さがあったそうです。奈良の大仏が 14.7 メートル、鎌倉の大仏が 11.4 メートルですから、昔の人はびっくりしたでしょう。

ところが紀元前 225/6 年の地震で膝のところが折れて倒れてしまい、二本の足は柱のように立っていたそうです。あまりに大きいので倒れた像は片づけられずにそのまま残っていました。(はっきりしないのですが、ローマの皇帝ハドリアヌスが紀元後 124 年に、倒れた像をもう一度建て直したという話も伝わっています。)

このロドスの巨像はとても有名で、世界の七不思議の一つだったそうです。ロドスの島は、この大きな天使が出てくるヨハネの黙示録が書かれたパトモス島からも、宛先の七つの教会からも、そんなに遠くないので、この天使のことを読んだ人たちはすぐに、「あっ、これはロドスの巨像に似ているな」と思ったはずです。しかし、この天使は太陽の神ではなく、神が送った使い、天から降りてきた天使です。そしてこの天使の姿が描かれた少し先を読むと、この天使が「天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方にかけてこう誓った」(6 節)と書いてあります。このすべてのものを創造された方が本当の神で、太陽は神ではないのです。太陽も「天の中にあるもの」の一つなので、本当の神が造ったものです。さて、このヨハネの黙示録を最初に読んだ人たちは、ローマの皇帝にいじめられていました。ローマの皇帝は自分は神の子だと言って、自分を太陽の姿にした像も造っていました。そしてその自分の像を神として拝めと命令しましたが、イエスを神の子、キリストと信じる人たちは本当の神ではない人間を拝むことはできないと言って拝まなかったので、いじめられたのです。だから、この大きな天使の姿のところを読んだら、「そうか、やっぱり太陽は本当の神じゃないし、その姿の像を造らせてるローマの皇帝も神じゃないんだな」と思ったはずです。」

《「献身」の主体は「キリストのからだなる教会」》

神学部准教授：日原広志



神は石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになります。それ故、献身者となるに値しない命など存在しません。一方で、献身には天の時があります。神はその人を宝のように重んじ愛し惜しむ故に、宝箱に入れるように大切に養い、生涯ただ一度の真の献身の時を与えます。神学校で神学を学ぶ機会はあるいは人生で数度巡ってくることもあるでしょう。しかし、諸教会、伝道所の祈りの結晶たる神学校献金から全国壮年会連合奨学金を貸与されて学べる恵みは献身者にとっておそらく人生に一度しかない高価な恵みです。教会は今が献身志願者にとって人生に一度しかない壮年会連合奨学金を受け取って学ぶべき時であるかどうかを、本人の一度きりしかない人生のためにも親身に考えて下さい。自己実現、自分探しの錯覚なら、本当に自己を棄てて献身する天の時が来るまで、教会で備えをさせてあげて下さい。

献身の主体は推薦教会です。献身者個人ではありません。個人としてではなく、キリストのからだなる教会の肢体としての献身です。教会の外に、教会と無関係に生起する召命はあり得ません。たとえ献身志願者個人が召命体験において神と我との1対1の関係を強烈に刻印させられたとしても、その基層には教会の長い祈りの歴史が存在しています。個人の持つ召命体験は、教会による祈りと神への傾聴を通じて、その錯覚、傲慢、熱狂、自己実現の罪が暴露され「教会の事柄」へと熟成されねばなりません。献身における聖霊の働きは献身者個人の召命体験にのみ存するのではなく、それ以上に推薦教会の熟慮と吟味を経た総会決議において顕されます。聖霊の導きの不可欠のプロセスとして教会による吟味はあり、「聖霊を冒瀆するものは赦されない」というみ言葉の迫りは吟味する教会に対してと同様吟味される志願者にも臨んでいます。

聖霊のみわざのかけがえのなさ、献身のかけがえのなさ、献身志願者の命のかけがえのなさ、献身志願者の人生のかけがえのなさ、推薦教会が立ち続けてきたことのかけがえのなさ、全国諸教会、伝道所の祈りのかけがえのなさ、神学校献金、神学生奨学金のかけがえのなさ、総会決議のかけがえのなさ、その重みにふさわしい熟慮と対話と霊的一致を以て、キリストのからだを引きちぎられる痛みを耐えて献身者を送り出して下さっている諸教会・伝道所に深く感謝申し上げます。

主は生きておられます。安心して下さい。

《毎日新しい人生が私の前に》

神学部教授：黄南徳



2022 年 4 月から始まった西南学院大学神学部教授の務めは私の人生における特別な新しい 1 ページです。これまで韓国で私は民衆教会の牧会を行い、エキュメニカル運動に参加しました。永登浦産業宣教会という団体のアジア URM(Urban Rural Mission)-Diakonia 部署で働いた時にはアジアの都市農漁村地域で働く実務者たちを韓国に招待して社会奉仕訓練をさせる仕事を担当したりもしました。

その時期にインド、インドネシア、フィリピン、タイなど様々なアジア地域を訪問してアジア民衆の現実を体験し、アジアネットワークを形成しました。そしてアジアキリスト教協議会(Christian Conference of Asia)の助けてフィリピンに行つて英語を学びましたが、その際フィリピン市民運動団体を訪問して実務者たちと対話できたことは忘れられない人生経験になっています。その後、アメリカに留学して黒人神学と宗教間の対話を学び、帰国後もアジア神学とエキュメニズムに引き続き関心を持って勉強しました。

市民運動にも参加しており、原爆問題に関心のある日本人と韓国人が一緒になって「日韓反核平和連帯」を結成し、これまで反核運動を共に進めています。国境を越え、文化と言語の違いを越えて平和を実践する国際市民社会運動の重要性について深く悟ることになりました。その後来日し、それまでの思いを実現するべく 2019 年に「東アジア平和センター・福岡」を設立して今日に至っています。〈東アジア平和センター・福岡〉は地政学的境界を越える平和運動のために、2019 年に沖縄で第 1 回青年平和学校を開催し、韓国、日本、中国の学生たちが参加して実施しましたが、残念ながら後続プログラムが新型コロナウイルス感染症のために今まで開かれていない状況です。2023 年に韓国・済州島で予定している第 2 回青年平和学校は、日本と韓国だけでなくインドネシアと台湾からも参加者を受け入れる予定ですが、一日も早くアジアの青年たちと会ってアジアの歴史と現代社会について学び、アジアの新たな未来のために共に知恵を用いたいと思っています。

私は西南学院大学での教授としての働きが単純に教室で学生たちに講義するだけでなく、日本と韓国、ひいてはアジアの青年学生たちが平和の働き手として羽ばたけるように傍らでサポートできることを願っています。正しい歴史認識を持ってアジアの平和と共生のために前進することができるよう、そのために若者たちが出会い互いに協力できる連帯のためにかけ橋の役割を果たしたいのです。学生たちに世界の教会とアジアの教会の多様なエキュメニカル教育プログラムを紹介して参加できるよう支援し、韓国の市民団体との間にインターンシップ(internship)カリキュラムを作りたいと思っています。西南学院大学の学生たちと一緒にアジア平和運動を展開するという考えはいつも私の胸をときめかせ、今日も研究室に向かう足取りを力強くしてくれます。

神様がくださった人生の後半期の西南学院大学での生活は新しい展望が私の前で繰り広げられていることを感じさせてくれます。それも毎日…

《中世について映画を見て、現代の問題を考える》

神学部教授 : Girardo Rodriguez



本年度も、「キリスト教史概論」という科目を担当していますが、前期では映画「薔薇の名前」の一部を使って、中世の教会の雰囲気を紹介しました。高校時代に初めて見た古い映画（1986年、ジャン=ジャック・アノー監督、ウンベルト・エーコの同名小説の映画化作品）です。それでも、神学部の1年生の学生たちはそれが面白いと感じ、後で自分で全部見ようという関心をもった人もいました。

実際、この映画には優れたシーン表現や美しい舞台があります。歴史や神学の学生にも興味深い内容です。北イタリアの中世の修道院を舞台に、中世後期のキリスト教会の状況について興味深い示唆が得られます。

中には、神学的論争、教会の伝統と聖書の権威、教会における権力、周囲の社会と教会との関係、宗教と科学的思考の複雑な相互作用、教義解釈の検閲と支配など、その時代のさまざまな問題について学ぶことができます。宗教改革が数年後に発展するのは、これらの背景からです。驚くべきことに、これらの問題のいくつかは、現代のキリスト教徒に非常に関連しているように見えます。ここで、キューバ系アメリカ人の歴史学者であるフスト・ゴンサレスの言葉が覚えさせます。

「この新しい世紀において、どの時代もそうであるように、キリスト者は新たな予期せぬ課題に直面しています。そのような挑戦に従順で対応しようとする際に、他の信者が同様の状況に陥った過去の時代のリソースがあります。(…) このすべてにおいて、過去は現在を照らすでしょう。」 (Justo L. González, *The Story of Christianity*. Volume 1. HarperCollins, 2010, pp. 4~5, 試訳)。

映画で描かれている問題のいくつかは、現代社会における宗教的保守主義と世俗主義の間の緊張に共鳴しており、それはロシアとウクライナの間現在の紛争にも部分的に反映されていると考えられます。一方、教義上の事項に関する宗教団体の決定は、神学的考察や真実と正義へのコミットメントよりも、団体内の力関係に依存する場合があります。

現代社会の課題に対応するうえで、私たちはここで、理性や歴史の出来事を参考しながら、聖書に基づいたキリストへの信仰を持ち続けることの重要性を思い起こさせられます。

この映画は、中世の教会の歴史について多くを教えてください。それはまた、現代の教会生活と社会におけるそれらの古い問題の出現を見つけるように導かれます。

来年も新入生と共にこの映画を探究し続けることを楽しみにしています。

3. 特集記事

《新入生の証集》

【私の歩み】

特別研修生：石原誠

私がバプテスマを受けクリスチャンになったのは2010年。そしてその10年後、2020年に献身表明をし、現在、神学部特別研修生という立場で学んでおります。

信仰の歩みが、やや駆け足のように感じた時もあるのですが、神さまを知る前の歩みも含め、すべては主のご計画だと信じ、今与えられています歩みに感謝しております。

私は1979年に大阪で生まれ、20歳のころまで大阪の地で過ごしました。そこではキリスト教と関わる機会はなく、幼い時から抱いていた俳優になるという夢を追い続け10歳から芸能・演劇活動に邁進しており、高校を卒業してからはさらに本格的な活動となっていました。しかしどんなに努力しても自分自身が満足する俳優の姿にはなれず、生活だけが乱れていったのです。ただ、ギリギリの状態ではありましたが、人との出会いや仲間にも恵まれ、助け合いながら生活していくことができました。

そんな私の歩みを大きく変える切っ掛けとなったのが長男の誕生です。私は、親という立場になる事でのプレッシャーや、今後の身の振り方に対する悩みで迷走していました。そんな時、クリスチャンになって間もない姉が「教会に行ってみたら」とアドバイスしてくれたのです。当時の私は気休めとしか思えず、御座なりな返事をしました。しかし不思議と教会への道が整えられ、導かれていったのです。そこで初めて神さまの事を知り、イエスさまとの出会いがあり、福音の恵みにあずかったのです。神さまは一人ひとりに「賜物」を与えてくださっている事。最善の「ご計画」を備えてくださっている事。一人で苦しまなくても「導き」示してくださるという事。この恵みを教えられ、一気に肩の力が抜けて神さまの愛に包まれ、自分本位に傲慢に高慢に生きてきた事を悔い改めたのです。その後私はバプテスマを受けクリスチャンとなり、自分を拘束していた、自身が思い描いた俳優の姿からも解放されたのです。

次第に私は、与えられた賜物を子ども達のために活かしたいという思いが与えられ、演劇を活用したコミュニケーション教育の教室や、劇場に行くのが困難な幼児のための演劇鑑賞会を開催するなどの活動を精力的に行ってきました。しかし2020年コロナ危機が襲ってきたのです。精神的、経済的に大きな痛手を負いました。しかし、主の前に静まり祈るという恵みの時間が与えられたことで、気持ちを切り替えて希望の光を見続ける事が出来たのです。私は恵まれた者だと実感しました。

同時に、この与えられた恵みをここで止めてはいけないと強く思われ、私の献身の思いは確固たるものとなり、西南学院神学部の門を叩いたのです。今現在は特別研修生という立場ですが、来年度から正式な神学生となり、神の武具を身に着けるための学びを深め、地の塩、世の光として主が遣わされる場で、喜んで仕えていきたいと願っております。全てはみ心、主のご計画と信じ、祈りと感謝を持って歩んで参ります。最後になりましたが、多くの方々の祈りとお支えに心から感謝申し上げます。

《献身し続ける思いを振り返って》

神学部3年：奥田 悟

私は牧師家庭に生まれましたので、教会で育ち、信仰はいつも生きる上での問題でした。部活をどうするかとか、学校や就職をどうするかとか、選択の問題でもありましたが、それ以上にアイデンティティーの問題と自分を知る、人間を知るという目的の問題でもありました。というのも、特に青年期に入って、聖書から、イエス・キリストからそうしたことに関する「問い」を与えられて、それに自分はとても惹きつけられたからです。

なぜ、自分は、人間はこんなにも愚かなのだろうか。自分を知り、人間社会を知るにつれ、その疑問は大きくなっていきました。そして、思うのです。なぜ、自分は、人間はこんなにも「幸福の前にあって」愚かになるのだろうか、と。

幸福、と言っても人間の幸福とは何か？を論じたい訳ではありません。戦争や悲惨な出来事の数々もそうですが、日常的な事でも人間は幸福追求の先に、そうした事を起こします。誰も自らをダメにしようと頑張ることはまれで、良くしようと思っただけで幸福から遠ざかっていく。では、欲望が欲求が悪いのか。私は考え続けました。イエス・キリストによって引っ張られていたのです。特に「神の国」、という「問い」は、あれだけ譬えられているのに見事なまでに分かりませんでした。（註解書などを読んでも！）そして、分からないからこそ、人間について、自分という人間についても考える事ができたのです。

一方でその営みの中心に教会生活がありました。人々に聖書の福音を伝える場所です。“何を”どのように伝えるのか、それが私の問題意識となっていきました。私は教会が好きです。教会が元気になり、活発になり、更に喜びをもって聖書を携えて伝道に向かっていけたら、どんなにいいか！と思っています。その為にはどうしたら良いだろうか？という事を長年考え続けて来ました。だんだんとキリストによって、聖書によって、それは整理されていき、大いなる恵みとして私の骨肉となっていきました。ですので、それを「他の事ではなく」献身して主に人生をささげていく事は私にとってはわりと自然な事でした。色々ある中で、私は確信をもって、責任をもって「これ」を選ばせていただき、主の計画の中に今一度入らせていただいたのです。

ですから、これから献身し続けることも主との約束において自然な事であり、それは結局は主によって成就されることを祈り求めます。文明は発達し、人間は強大な力を形成しています。しかし、どこまでも愚かなのは、精神が文明と同じような発達過程を踏まないからです。キリストにおける信仰が人間にとっていかに有益であり、幸福なものであるか、献身し続けて少しでも実りのあるものになるよう、私などでもお役に立ちたいと心から願うのです。主イエスこそ、来たりませ、アーメン。

《召命決意—人生の失敗をも活かされる神にすがって》

特別研修生：湯川洋久

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。---そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」(マタイ書 11 章 28、29 節)

この聖句はクリスチャンにとってあまりにも有名な聖句である。本当に魂のレベルで苦しむ人の癒しとなる存在でありたい、と願い、牧師として二度目の召命決意を行った。

最初の召命時は、日系アメリカ人や黒人教会での副牧師職を担いつつ貧困問題に取り組んだ。911 事件で帰国。主に貧困問題に召しを感じていたことから、牧師よりも国際協力専門家として働いていたが、徐々に教員・研究職に。

ふと気が付くと、達成感のない、中途半端な思いで過ごしてばかりいたことに気が付いた。中途半端な状態で道が途切れることも多かった。あの時、こうすれば。。。という思いを頭から拭いたくとも拭えぬ時もある。神様の意思を探りつつ、意思決定や選択の下手さに中途半端な結末を迎えるばかりだった。

神様に従っていなかった故の失敗？そもそも神様のご意思って何？悩み、神様に向かって叫ぶばかりだった。結局、失敗の人生？なのか？

段々と、今までの発想での信仰—神様の望む道を探る—では、私のようなタイプでは立ち行かないことが分かってきた。事細かに道が指示されるとは限らないと考える方が妥当だと思えるようになってきたのだ。よりしっかりと神学を理解する必要を感じ出してきた。

同じような思いで苦しむ人も多いことに気が付いた。私のように、強い、正しいクリスチャンではないクリスチャンは、必ずしもいつも喜んでいられるばかりではないし、神様に愚痴り文句を言いたくもなる。しかしそういう言葉を発すると、弱い、傲慢な、と評価されてしまうこともある。

「清く正しく美しい」クリスチャンのイメージは、あくまでピューリタンの影響を受けたものに過ぎず、本質ではないことも知った。教会を離れる人にはこのような「正論」を敬遠していることも知った。

強く正しいクリスチャンであるための正論を論じるのではなく、もっと、本当に魂の叫びに寄り添うクリスチャンでありたい。そう考えるにつれ私は、貧困問題を中心に扱うのではなく、魂の問題を扱う、牧師になることが視野の中に入ってきた。

イエス・キリストでさえ人生の最後たった 3 年しか世界に名を残す業をなさなかった。モーセは志半ばで世を去った。私も人生の最後に何らかの形で神様に心から仕えたいと思い、ここに再度の召命決意を行うのである。

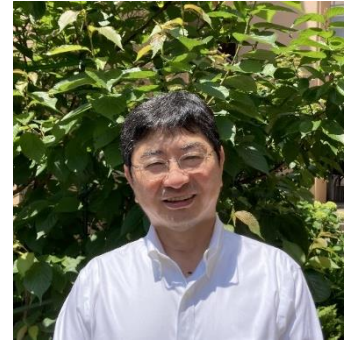
3. 神学生紹介

《牧会とスピリチュアリティ―ヘンリ・ナーウェンにインスパイアされて―》

研修教会：福岡城西キリスト教会

推薦教会：福岡城西キリスト教会

特別研修生（今年度卒業見込み） 湯川洋久



牧会がうまくいくかどうかは、それを行う人がうまくできる能力があるかどうかというよりも、それを行う人を通じてイエスの光がよりよく見えるかどうかにある。

現代社会では、癒しや病の回復のための各種手段が整っている。例えば「心理学者、精神療法士、結婚カウンセラー、医師」は、それぞれの分野の専門家であるから、牧師よりも彼の方がそれらの分野に関する相談についてはより解決能力があるものである。

しかし、もっと心の奥底の問題、つまり魂レベルでの心の渇きを訴える人間に対しては、上に挙げた専門家でも対処しようがない。牧会者たる牧師はそのような面に関する専門家なのだ。

魂レベルの専門家であるためには、魂に関する知識と専門用語を駆使し、スパッとした切れ味の良い刀でものを切るようなわけにはいかない。むしろ他の分野の専門家とはまったく逆の道筋を通らなければならない。それは「すべての華やかな成功の裏に潜む苦悩と深く連帯し、そこにイエスの光をもたらすように私たちを導く」ことなのだ。それはまず「神の御声に耳を傾け、神の美しさを仰ぎ見、神の受肉した言葉に触れ、神の無限の善を十分に味わうために、神の臨在の内に住もうとする、燃えるような願いを持つ」ことである。次に「人々の注目を浴び、大きな称賛を勝ちうる何かをして見せること」ではなく、むしろ「癒すのはイエスであって私ではない」という強い自覚をもって「仕える」必要があることだ。そして仕える方法は「相手を知ると同時に自分が知られ、世話をすると同時にこちらも世話をされ、赦すと同時に自分も赦され、愛すると同時に愛される」という形においてである。さらに「リーダーシップ」というものの主要な役割が、主に導かれることにある、という神秘」的なものであるという自覚も必要である。

最も重要な資質は「神の苦難のしもべであるイエス・キリストが日飛び地の目の前で示された、無力さとへりくだりのリーダーシップ」である。

自分自身の能力で牧会を行う場合には、その能力の範囲内での結果しか得られない。牧会の場合には、むしろ逆効果をもたらす場合さえあろう。自分自身の無力さに打ちひしがれる時こそイエス・キリストの光のみの働きによって牧会がなされるのである。この世的にはその結果は失敗とされるかもしれない場合であっても、そこに見える光は真のイエス・キリストの光を放った、神々しいものである。

（カッコ内はヘンリ・ナウエン「イエスの御名で」より引用）

《変わらない目標・変わる在り方》

研修教会：福岡西部バプテスト教会

推薦教会：平尾バプテスト教会

神学研究科修士1年 原田 仰



私は8人家族である。私は末っ子としてこの家で育ち、22年が過ぎた。最近、家族における父の立ち位置が変化してきたように思われる。厳密に言えば、家族全員の立ち位置に変化が起きているのだが、それが父においては顕著に表れているのである。

この変化に気が付いたのは、ごく最近のことである。姉の一人が病気から回復し、その快気祝いとして、たまには外に食事に行こうと言い出した時のことである。まず、最初に提案を受けた店は少々値段が高めの雰囲気の良いお店であった。感染症の騒動が起きる前から、最近まで家族で外食には行くことができていなかった。父なりに、家族に美味しいものを食べさせたいという想いがあったのだろう。結果的にその店は休業だったため、選びなおさなければならなくなった。結果的に最初に提案された店より値段的にも雰囲氣的にも少しグレードを落とした店に行くことになった。変化を感じたのは、これを決めるまでの過程である。起きた変化をまとめるとこのようになる。まずはリーダーシップをとる役割が、父から末っ子の私へと変わったこと、そのうえで店選びの基準は姉たちであったことである。我が家にとって、このような突飛な出来事でのリーダーシップはほとんど父の役目であった。そこに末っ子である私が入り込む余地などはほとんどなかった。それが、私も年齢を重ねたこともあり、父は必要なサポート体制は持ちつつも、私の提案・リードを全面的に受け入れてくれた。また店選びの基準は雰囲気が良すぎると、むしろゆっくりできないなどの姉たちの性格に合わせたものであった。今までは、それぞれの好みや予算くらいしか店の基準に入ることはなく、姉たちの性格に配慮することはなかったと思う。そこに新たな基準が設けられた。これは姉たちの発達障がいに対する理解が広がったことによる変化である。今まで「良い」とされていたことが、実は良くなかったことが分かってきた。リード役が私になったのも、それによりよく対応するためだ。

これは私にとって身近な共同体での出来事だ。この共同体の「家族を大切にしたい」という想いはずっと変わらない。しかし、その在り方は変化していた。これには世代交代の課題を抱える「教会」という共同体に対するヒントが隠れているように思える。神様のみ旨を行うとき、今まで「良い」とされてきた方法論や基準は、本当に「良い」と言えるのか。その問いは思っても見ないところからするべきなのかもしれない。見慣れてしまった環境だからこそ、見落としているものがあるかもしれないからだ。

《ノアがすごいんじゃない》

研修教会：早良キリスト教会

推薦教会：博多キリスト教会

神学研究科修士1年 吉田睿濫



最近創世記を続けて黙想していますが、6章からノアの物語が登場します。老若男女、クリスチャンでもノンクリスチャンにとっても知れ渡るようなこの有名な物語の内容のある一つの箇所に私の目が止まりました。「これはノアの物語である。その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人であった。(創6:9)」ここに出てくる無垢とは汚れのない、純粋で潔白である状態を表しています。世界人口が増えていくと同時に人の悪も増していき、神さまが肉なる者の墮落を残念に思われている中で、ノアはその悪に影響されることなく「無垢」な人であったということです。このノアの物語を一読してみるとノアがどこか聖者のように聖く、尊敬すらも感じさせられるのです。しかし、私はふと疑問を覚えます。ノア自身は自分のことを特別な存在であると認識していたのだろうか。いや、おそらく彼はそうは思っていなかった。むしろ周りの人間たちとは慣れ親しむことができず、理解されず、もしかしたら非難すらも受けていたでしょう。それでも聖書はノアを無垢であったと記しています。つまり、周りが認めたのではなく、神さまの目に彼は無垢であったということです。この部分を黙想した時、自分の献身について再度考えさせられました。ノアが無垢だと神さまに認められたのは、彼が能力や何か尊敬されるようなものを持っていたからではなく、ただ純粋に神さまの声、御言葉に聞き従っていたこと、それだけでした。実際にノアが箱舟の設計図を考案したのでも、動物たちを呼び寄せたのでも、大洪水を起こす雨を降らせたのでも、人類を裁いたのでもなかった。ではあなたの献身は果たしてノアのように純粋な従順者として歩んでいるだろうか、自分が思う献身の姿の設計図を考えていないだろうか、実際に自分が雨を降らせようとしてはいないだろうか、神のみ裁く事のできる人間を献身者という名分で自分自身が裁いてはいないだろうか、という問いを神さまは私に与えられました。神さまの宣教の主体は神さまであって、自分では無いことを再度思わされ、改めて悔い改める時でした。

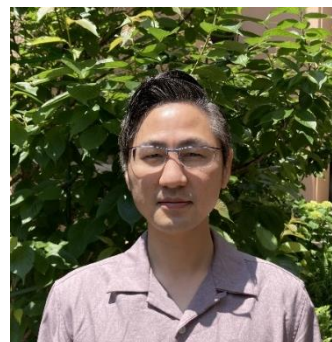
皆さんもそれぞれの場所で神さまに自らを「献身」しておられるでしょう。あなたの献身がより神さまのものとなるために、あなたの中におられるイエス・キリストが今日どんな御言葉をくださっていますか？その御言葉にあなたはどうか応えていますか？私たちの献身を通して神さまが豊かに働かれますように。

《佇立》

研修教会：長住バプテスト教会

推薦教会：東京北キリスト教会

神学部神学科 3 年 奥田 悟



夏季休暇となり、改めてこれまでの日々を考えると、「何とかなるだろう。」と呟きながらの毎日で、実際なんかやってきたような心持ちを淡い想いで振り返る。自己暗示として自らに言い聞かせながらの日々、という訳ではない。社会において、教会において、何よりも聖書、キリストにおいて、エラーを繰り返しながら身体に刻まれ、深められてきたキリストの教えが、その言葉の土台となっている。

なにしろ、20 年ぶりの学生である。曲がりなりにもイエスという教師における生徒として取り組み考え続けてきたことが、この減退する記憶力、感性、発想力の強力な助け手となっている事は有難いことだ。そして、モラトリウムという大義があったとしても、若造の馬子にも衣裳的学術遊戯だった以前（思い出すだけでも赤面である）と明らかに違うのは、あらゆる意味での把握である。

「自分が今、何をしているのか」分かるという事は十字架上のキリストの声を聴くまでもなく最も本質的な事であり、「自分が今、本当は、何をしているのか」というキリストの真理性において、客観性を伴った足もとを与えられている事に改めて大いなる主に感謝したい。

そして、感謝と言えば、教会である。推薦教会である東京北教会。新会堂が建ちあがり、今後の歩みに向けて手探りの中でも懸命に推薦教会としての責を果たそうと努力してくださっている。また、研修教会の長住教会では毎週の礼拝、祈り会を共に守りながら、この不慣れな新会員を一教会員として交わりに加えてくださっている。特に中條譲治牧師、中條智子牧師は温かく、関心をもって迎えてくださり、神学生生活のスタートを支えてくださっている事は感謝にたえなく、励ましていただいている。

春から半期が過ぎて、教会、あるいは信仰と神学との乖離の問題は、私自身は然程の問題では無いように感じてきた。依然とした西洋式神学メニューであるにしろ、要は本人の信仰の成熟度の(特に内的な)問題である。神学をとっかかりに、この私の未熟な信仰に、実際、変化があるのか、ないのか、更に楽しみに神学に取り組みたいと思う。

そして、様々な、教会における今日的課題に、それもと宗教的な課題に、明確で責任を持った、具体的な道を、聖書、キリストを通して与えられていきたいと、切に願うのであります。加えて、献身者の数がただ増えればよいとは決して思わないものの、来年か、再来年か、はたまたいつの日か。やはり、共にキリストを愛し、教会を愛する、散々エラーを経験し尽くした信仰者と、学友として日々を過ごす事もまた、切なる願いであります。

《4人目のもの》

研修教会：福岡城西キリスト教会

推薦教会：府中キリスト教会

神学部神学科2年 長尾基詩



ダニエル書3章13-30節からメッセージを取り次ぐ機会を頂いた。燃え盛る炉に投げ込まれる3人の物語である。ネブカドネツアル王の怒りに触れたシャドラク、メシャク、アベド・ネゴは、自分たちの仕える神が必ず自分たちを救うと告白し、炉に投げ込まれる。しかし、王は炉の中に4人のものを見る。火の中を自由に歩き、何の害も受けていない4人のものの姿を。さらに王は4人目のものを「神の子」の姿をしていると言う。シャドラク、メシャク、アベド・ネゴはその体から一切を損なわれることなく、炉から出て王に称えられる。

「神の子」のような姿をした4人目のもの。私はここにおいて課題に行き当たった。キリスト教会は歴史上この箇所を読むときに、この4人目のものをイエスキリストと解し、慰めと希望を得ていたことは理解できる。しかし、ダニエル書の著者がそこまでの意図をもってこの物語を著したとは到底考えられない。原語をたどってみるもこの語は「ベネーエロヒム」という言葉で、「神の子」と訳せるが、同時に「神の僕」等に訳されうる言葉である。これだけでは、この語が何を指しているのかを具体的に特定するまでには至らない。神の僕という言葉から連想するに少なくとも神自身ではない存在、天使、み使いといったイメージが最も近いのではないだろうか。

私はある種の冷静さをもってこの語の釈義の結論を出した。4人目のものが特定できない以上、メッセージの主題をここにはおかず、み使いとして言及するにとどめた。当時は理性的な判断をしたと自負していた。しかし、それはもう打ち終わってしまった鉄のような恐ろしい冷たさを持っていた。礼拝後、説教の感想を分かち合う機会を持った。一人ずつマイクを握り、訥々と感じたことを語ってくださった。「神学生（私）はいろいろと勉強して説教なさってくれて感心した。でも4人目のものに関しては、私はイエスキリストであるという読み方もありだと思う。」一人の方がこのようなことを仰ってくださった。その時私は自分に説教者としての力量が足りていなかったことを悟った。4人目のものが結局だれか。確かに重要な問題に違いないがもっと大切なことがあった。聴衆と共に葛藤し、苦悩する信仰の戦いから逃げないこと。真に私に必要だったのは説教の感想を言葉に詰まりながら話してくれたあの一人の信仰者の苦々しい表情そのものであったのだろう。決して言いやすくはなかっただろう感想を下さった信徒の方に感謝したい。自分のメッセージを見直す機会、気づきを頂いた。何よりも成長させてくださる神様に感謝しつつ真摯に聖書に聞き入り、その言葉を伝えられるように仕えていきたい。

《平和月間を経て・・・》

研修教会：鳥飼バプテスト教会

推薦教会：常盤台キリスト教会

特別研修生 石原誠



研修生という立場ではありますが、神学生という状況で平和月間の8月を初めて迎えた2022年は、色々と平和についての考えを巡らす時でした。

その最初のきっかけは、8月5日「東アジア平和センター・福岡」主催の原爆写真展示と講演会です。原爆投下に関する、全記録のドキュメンタリー上映があり、その後、西南学院大学神学部長 濱野道雄教授をはじめ全3人の方の講演をお聴きしたのです。

そこで、原爆の残虐性を改めて実感するとともに、当時の体験談から深い傷と多くの痛みに触れ、今なお起きている戦争の現実を知り、人間の愚かさ、弱さ、罪深さなど、私の心にも間違いなくある「闇の力」とでもいうべき「原罪」の根深さを思い知った気がしました。

次に軍事政権に制圧されたミャンマーの今の状況を知る機会が与えられ、生々しい現実を知るとともに、平和へ向けての道を深く考える時となりましたが、その道は、決して簡単ではなく、陰しく長い道程になるだろうという事態にも心締め付けられる思いになりました。

その数日後、母教会である常盤台バプテスト教会ではオンラインによる、広島、長崎、終戦を覚えての沈黙と祈りのひと時が6日、9日、15日とあり、平和を願う人々が一つとなって祈る。その輪に加わりました。毎年参加はしているのですが、今年はその意味を考えるひと時になりました。

この平和月間を通して思わされた一つは、『それぞれが「平和」に対して思い描いているイメージが違うのではないか』という事です。だから、自分の思う平和の主張を通す為に相手を傷つけるという、矛盾が起きているのではないのでしょうか。また、それに対して、誰もが持っている「闇の力」が報復という形で姿を出し「戦争」を生み出しているように思われました。

私たちキリスト者が目指す平和は、聖書から正しくみ心を受け取り、「神の国と神の義」を目指す。この事に尽きると思われます。

私はイザヤ書11章6節～9節の、人の理解ではあり得ないようなこの世界観を、どこまでも追いかけてしたいと思います。

もう一つ思わされたのは『人は誰しも力を持っている』という事です。「力」というと武力や腕力、暴力の様な力を思い浮かべてしまうかもしれませんが、「非暴力」それ自体も人に影響を与える力だと思うのです。また体験した痛みを人々に伝える事も、過ちを繰り返さないため、未来に影響を与える力になるはずです。そして一人ひとりの発言や行動が力となり、その連帯がさらに大きな力になると私は信じています。

主にある平和をつくり出すことが出来るよう、一人ひとりの力が正しく用いられ、平和の器とならせてくださいますようにお祈りいたします。

4. 編集後記

神学部誌「道」が現在の形になって今年が2回目の発行となります。連盟諸教会の皆様には日ごろからの多大なるお祈りと支援を頂き、神学生一同大変感謝しております。皆様からのご支援に基づいた学びをさせていただいている私たちが各々、キャンパス、教会等で見聞きし、考え、また示されたことを綴らせていただきました。牧師招聘、献身を考えている教会の方々に参考になればと思います。何より本誌が諸教会の皆様へ私たち神学生がただ支援を受け取るだけでなく、相互の関係を築き上げていくための建設的なツールとなれば幸いです。

本誌執筆時点（2022年度後期）では、6人の神学コース生が西南学院大学神学部には在籍しています。やはり献身者が減少していると言わざるを得ない状況にあり、神学部学生会運営にあたっての各自の負担割合も増加しております。学びに向かう学生の立場からしても一人でも多くの召命を受けた仲間と意見を戦わせ、研鑽を積みたいというのが切なる願いです。諸教会の皆様には重ねてお礼申し上げるとともに献身者が起こされるようにお祈りいただきたいです。

どうか皆さまに主からの豊かな祝福がありますように。

2022年度 西南学院大学神学部学生会「道」制作担当一同

『道』2022（年刊・第47号）

発行日 2022年10月1日

発行者 西南学院大学神学神学部学生会

編集 神学部学生会「道」制作担当

原田仰 吉田睿濫

奥田悟 長尾基詩

Seinan, Be True To Christ.

西南よ、キリストに忠実なれ。